



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:29-30.

統合失調症を有する者が地域生活において思い描くリカバリー

工藤 美優, 小泉 彩弥

統合失調症を有する者が地域生活において 思い描くリカバリー

工藤 美優 小泉 彩弥
(指導：長谷川 博亮 石川 千恵)

緒言

平成 16 年、厚生労働省は「精神保健医療福祉の改革ビジョン」において「入院医療から地域生活中心へ」という方策を示した。精神科新規患者の入院期間は短縮化にある反面¹⁾退院しても症状が安定せず再入院になるケースが多い。統合失調症を有する者の治療継続のためには治療の必要性の理解に加え、人生における夢や希望、目標に目を向け、治療にどのような意味を持つかが重要である。このような夢や目標を目指す過程の一つとしてリカバリー概念があり、近年わが国でも注目されている。

先行研究ではリカバリーの視点は統合失調症を有する者と看護者で差があり²⁾、実際に体験するリカバリーと看護者が考えるリカバリーの概念は区別する必要がある³⁾ことがわかっている。しかし統合失調症を有する者が思い描くリカバリーそのものに着目した研究は少ない。本研究ではリカバリーを支援する看護的アプローチを示唆し、統合失調症を有する者の思い描くリカバリーを明らかにすることを目的とする。

方法

研究対象：X 市の就労支援施設に通う統合失調症を有する者で次の条件を満たす者 3 名。①地域で安定した生活をしている、②20 分の面接に口頭で答えられる認知および思考が保持されている、③生活リズムが整っている、④初対面の面接相手においても対人関係に影響がない、⑤本人から同意を得ることが可能な者とした。

調査方法：Y 就労支援施設のプライバシーが保たれた個室にて対象者 1 名に対して研究者 2 名で 1 回 20 分程度の半構造化面接を行った。対象者の承諾を得てインタビュー内容を録音した。調査は 2018 年 10 月に行った。

調査内容：インタビューガイドを用いた。項目は①基礎情報、②生活スタイル、③家族や地域とのかかわり、④発症前から現在までの目標や夢の変化、⑤目標や夢を叶える過程において後押しとなった出来事、もの、援助である。

データ分析方法：ベレルソン(1975)の内容分析を用いた。逐語録を作成し、リカバリーに関するデータを抽出・コード化した。次にコードを意味内容により類似分類し、サブカテゴリー、更に抽象度を上げたカテゴリーを作成した。これらの過程において結果の妥当性を高めるために随時指導者にスーパービジョンを受けた。

倫理的配慮：本研究は旭川医科大学の倫理委員

会の承認を経て実施した(承認番号：18056)。

対象者へ研究の趣旨及び本調査への参加は自由であり調査の拒否・中断が可能であること、拒否・中断による不利益はないこと、プライバシーを保護すること、研究に関する情報提供、データの管理及び処分方法に関して口頭および書面にて説明し書面にて同意を得た。

結果

対象者は 3 名で男性 1 名、女性 2 名であった。75 のコード、17 のサブカテゴリー、5 のカテゴリーを抽出した(表 1)。以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉で表す。カテゴリーは、【普通の生活ができること】【対人関係の広がり成熟】【折り合いをつけて仕事を行うこと】の 3 つ、リカバリーに影響する要因として【支援の活用】【症状のコントロール】の 2 つが挙げられた。

考察

1. 統合失調症を有する者が地域生活において思い描くリカバリー

統合失調症の症状は非常に不快でつらく、時に恐怖をもたらす苦痛な体験⁴⁾として語られている。一般に治療者は就労・家庭での役割に治療ゴールを置くことが多い²⁾。しかし健康な者が気にも留めないような【普通の生活ができること】自体がリカバリーとなっていると明らかになった。また、〈病気を意識しなくてよい生活〉が基盤となり、〈生活の向上〉〈趣味〉という段階・広がりを持つことが明らかになった。看護者は統合失調症を有する者の生活レベルを踏まえ、目指すリカバリーの段階を把握し、統合失調症を有する者との考えにズレが生じないようにしていくことが必要である。

統合失調症の症状として現実からの逸脱や、他人に対し警戒的・口ごもりがちになる傾向があり⁵⁾、対人関係を築くことが難しいと言える。そのため、〈近所の人との負担のない交流〉を図れていることは、症状の影響を受けずに社会生活ができていると考えられる。このような他者とのかかわりを始めとし、仕事や異性とのかかわりといった親密な関係性が必要となるリカバリーへと進むことができると示唆される。

〈家族とつかず離れずの関係〉のリカバリーが抽出された。親は子が統合失調症の診断を受けることで衝撃を受け、子の回復と再発を繰り返し経験することで症状への対応に迷走する⁶⁾。親も疾患を受容するのが難しい中で、症状と付

き合い家族と関係性があることは、障害を受容し新たな家族関係を築いていると言える。障害を抱えながら家族機能を安定させることもリカバリーとなっていると考えられる。

宮嶋ら⁶⁾は統合失調症を有する者の恋愛・婚姻関係を継続する上での困難さとして一般の人と同じようにできるのかという交際後の心配や、自分自身を受け入れてくれるのかなどの不安を抱くことを示している。また、出産・子育ては気分の動揺や身体的な変化を伴うものであり、自我機能が脆弱で自律神経系統のバランスを崩しやすい統合失調症を有する者が耐えられるのかと多くの精神科医は危惧する⁷⁾。しかし、恋愛・結婚・子育ては統合失調症を有する者の人生の質を考える上で最も重要な事柄の一つである⁸⁾。本研究の中でも〈異性との親密な関係を築く〉〈配偶者との生活〉〈子供の養育〉〈子供との生活〉のリカバリーが挙げられ、恋愛・結婚・子育てが人生の中で大きな位置づけとなっていた。また、これらのリカバリーは一つ一つの段階を達成することが次の段階につながっており、段階を踏むことで家族としての機能に深みを持つ。看護者はこのような家族の深まりにも目を向けていく必要がある。

【折り合いをつけて仕事を行うこと】のリカバリーが抽出された。統合失調症を有する者が社会での仕事を通して周囲から認められ、居場所を持つことで病状の軽減や、主体性の発展・成熟につながり、精神障害を乗り越える手段となる。また、仕事を通して対人的な接触の回復、連帯感の体験、楽しみに結びついた義務感が得られる。しかし、統合失調症を有する者は、複雑な人間関係技能を要求される仕事を不得手とする⁹⁾。そのため、自身の状態を踏まえ、現実的に達成可能な仕事のリカバリーを抱いていると考えられる。加えて仕事をしてお金を稼ぐという生活の手段としても仕事は重要であることが明らかとなった。やりがいを持って仕事をするだけでなく生活のために継続して働くこともリカバリーとなっていると考える。

2. リカバリーに影響する要因

〈安心感を得られる支援〉〈生活を見守ってくれる支援〉〈金銭的な支援〉の【支援の活用】が生活の安定・維持・向上のリカバリーを支える要因となっていることが明らかとなった。症状による生活の中での不安を解消できること、疾患による生活能力への影響を補うこと、収入では不足した生活費を補填できることという主体的な支援の活用がリカバリーを後押しする要因となっていると考えられる。

安定した生活を行っていくためには、治療を継続し症状をコントロールしていくことが必要である。しかし、予期せぬイベントにより症状

の悪化が生じたり不適切な行動を行うことがある。そのため症状のコントロールが難しくなる場合がある。このような危機状態を看護者が失敗として捉えるのではなく、統合失調症を有する者が経験として積み重ね学習していけるような支援が重要である。

謝辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力・ご指導いただいたすべての方に深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 長束直人,丸山由美子: A 病院における再入院防止への取り組み,日本精神科看護学術集会誌 60 巻 1 号,206-207,2017
- 2) 丹羽真一: 成人の統合失調症 リカバリーを目指す治療戦略,脳 21 19 巻 1 号,53-56,2016
- 3) 池淵恵美: 【国際動向をふまえた日本の強みと展望-精神障害リハビリテーションの変遷と現状】エビデンスに基づく実践 (EBP) と パーソナルリカバリーの時代,精神障害とリハビリテーション 21 巻 2 号,117-126,2017
- 4) 富川順子ら: 統合失調症を持つ人の resilience, 日本保健医療行動科学会雑誌, 30 巻 2 号, 45-52, 2016
- 5) 川口めぐみ, 北岡和代: 統合失調症の子をもつ親の経験: 発症から地域生活継続に至るまで親はその経験といかに付き合っていたのか, ウェルネス・ヘルスケア学会, 41 巻 2 号, 57-67, 2018
- 6) 宮嶋涼ら: 当事者が恋愛・婚姻関係を築き、継続する困難さへの対処や想い〜地域で生活する男性当事者を対象とした質的研究〜, 北海道作業療法, 29 巻, 106, 2012
- 7) 夏苅郁子: 女性当事者の人生一恋愛・結婚・子育てを中心に, 医学のあゆみ, 261 巻 10 号, 1037-1042, 2017
- 8) 池淵恵美 (2006): 統合失調症へのアプローチ, 143-144, 星和書店.
- 9) 加藤敏 (2005): 統合失調症の語りと傾聴 EBM から NBM へ, 53,154, 155, 157-158, 金剛出版.

表 1. 統合失調症を有する者が地域生活において
思い描くリカバリーとリカバリーに影響する要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
普通の生活 ができること	病気を意識 しなくてよい生活	入院のない生活 生活に困っていない
	生活の向上	生活の向上という目標
	趣味がある	映画館に行きたい
		本屋での買い物が好き
対人関係の 広がりや成熟	近所の人との 負担のない交流	挨拶程度の近所とのかかわり
	家族とつかず 離れずの関係	家族と居住地の遠さ 家族との電話での連絡手段
	異性との親密な 関係を築く	彼氏と同棲したい
		彼氏との継続的な付き合い
		彼氏の病気への理解
	配偶者との生活	妻との協同生活
	子供の養育	娘の成長が楽しみ 子供の将来への関心
折り合いを つけて仕事 を行うこと	子供の生活	子供が生活の楽しみ
	仕事の継続	仕事は続けたいという思い
		体調に合わせた仕事量の調整
		1日働くという目標
支援の活用	現実的な仕事の夢	本屋でアルバイトをする夢
	生活のための仕事	生活のために仕事を行っている
	安心感 得られる支援	相談することで安心できる
	生活を見守っ てくれる支援	施設職員から受けた育児支援 生活の中での母親からの支援
症状の コントロール	金銭的な支援	生活保護を受けながらの生活
	通院の継続	月 1 回の通院ができている
	症状への 不適切な対処	過量服薬による入院